

氣 Kyokushin Karate 2011.9 武

◇港支部ホームページアドレス◇
<http://karateman.jp>

志田道場 六本木・新橋・田町 師範 志田清

夏季昇級昇段審査会のお知らせ

◎日時 2011年10月15日(土) 12時30分～

◎会場 極真会館 六本木道場

〒106-0032 東京都港区六本木4-9-5 ISOビル8F
TEL 03-3459-9998 (問い合わせ用)

●審査の申し込み締め切り日10月13日(木)

●新橋道場追加審査日:10月17日(月)21時(新橋道場にて)

●六本木道場追加審査日:10月18日(火)21時(六本木道場にて)

※追加審査会対象者:白帯～8級

注) 本部登録を済ませていない方・不備で再提出の方は10月13日(木)までに師範・指導員に提出して下さい。

注) 昇級審査受審資格 合宿参加規定回数が変更になりました。

○黄帯→緑帯 1回 ○緑帯→茶帯 1回 ○茶帯→黒帯 1回

あまり稽古が出来ていないからといって躊躇している方もいると思いますが、まだ審査会まで時間はあります。皆さん頑張ってください。

稽古の目的とは？

武道空手を稽古する目的は、精神力養成とともに武道空手本来の「理合」を学び、稽古を継続し理合を体得していくことが目的です。古来武道では理にかなった術技、身体操作方法を「理合」と呼んでいます。そして理合(理にかなった)のある術技、力の出し方・使い方を稽古することが、古来稽古の目的とされています。しかし、日々の稽古で陥りやすい問題として、理にかなった術技なのか？ 体格腕力でかけている術技なのか？ 今の年齢だからできる動きなのか？ 分からないまま稽古をしているケースもたくさんあります。600年の歴史を持つ空手の基本・移動・型・組手の型に、どのような理合が隠されているのか？ 体格腕力を克服する術技とは？ 強靱な精神力とは？ それを稽古で見抜き気付き体得していかなくてはなりません。ですが焦ったり、無理をしてもいけません。ご自分のペースで稽古して下さい。理合のある術技を少しずつ体得して行けばよいのです。理合ある術技を稽古すれば少しずつ相手を制する事が可能になり精神力の養成にもつながります。ご自分のペースで頑張ってください、応援しています。☆空手における理合:理にかなった身体操作方法、術技方法

武道家のバイブル「葉隠」

「才能」

ある人は、第一に物事に動ぜず、才能もあり頭脳も鋭くて、お役に立つ人物である。この前、「その方は、頭のよさが全て外に表れて、奥ゆかしいところがない。少し鈍くなって、十のものを三つか四つくらい内に隠しておくことはできまいか」と言ってやったところ、「それはできません」と申し立てた。うまくおだてて、幕府への使いなどをさせると、どんなことでもこなしていくところがある。しかし、殿のお側や、お国の政治など、重大なことは決してさせてはならないと思う。頭の鋭さや知恵ですべてが片付くものと思っている。しかし、その知恵や頭の鋭さほど、鼻持ちならぬものはない。第一に人々が信用せず、心を許した交際ができないものだ。これにひきかえ、ある者は、不器用ではあるが、実直な人物であるので、立派にやってゆける奉公人である、とのことである。知恵のある人間は、真実の行いも、真実でない行いも、知恵で組み立てるから、全て理屈をつけて通用すると思っている。これが知恵の害になるところだ。何事も真実でなければ値打ちがない。勘定高い者は卑怯である。そのわけは、勘定は損得を考へることであるから、いつも損得の心が絶えないものだ。死は損、生は得であるから、当然死ぬことを好まない。だから卑怯な行いをするのである。また学問のある者は、才知や弁舌で生まれつきの臆病や欲心やうまく隠している。人々がよく見誤るところだ。才能は十のうち三つか四つは「しまっておく」

四十歳からの「意地の立て方」

ある人が、「意地には内にあるものと外にあるものとの二つがある。外にも内にも無いというのは役に立たない意地だ。たとえば刀身のように、切れ物をよく研ぎすまして、鞘に収めておき、ときどきは抜いて打粉をふり、よく拭いてもとに収めておくのがよい。それを抜いてばかりいて、いつも白刃を振り回す者には人が寄りつかないで、味方になる者もないだろう。しかし、鞘にばかり収めていたならば、錆びもつき、刃も鈍って、

人が軽蔑するようになる」と言った。古老たちの話では、武士が意地を立てるときには、行きすぎたと思われるくらいにした方がよい。いい加減なところで妥協しておく、あとあとの評判が芳しくなくなるものだ。やりすぎたと思ってやった方が、かえって仕損じがないものも聞いている。このような話も忘れないようにしなければならない。四十歳までは、知恵分別を用いず、意地を張り通すほどの強さが必要である。しかし、その人柄により、また身分によっては、四十歳を過ぎても、意地の強さが表れていないと張り合いがないものだ。四十歳までは何事も強く進み出るがよい。しかし五十歳が近くなると控えめにするのがふさわしい態度だ。

「時の運」をつかむ法

誰も彼もが氣短になったせいか、大事を仕損じることがある。いつまでかかってもかまわないと思っていれば、案外と早くできるものである。時の運がめぐってくるのだ。これから十五年先のことを思ってみるがよい。きっと世の中は変わっているだろう。しかし、『未来記』などという本を見ると、そんなに変わったことはないかもしれぬ。だが、いまどきお役に立っている人間は、十五年過ぎると一人もいなくなっているだろう。いまの若い衆がそれに代わって表面に出るとしても、半分も出てこないかもしれぬ。だんだんに人の品格も下がってきて、金が少なくなれば銀が一番の宝となり、銀が少なくなれば銅が一番の宝となるようなものである。時代とともに、人間の器も下がっていくことであるから、一つ精を出せば、十分にお役に立つこととなる。十五年ぐらいいは夢のあいだのことである。わが身の修養を怠らなければ、いつかは念願を達し、お役に立つことができる。名人が多くいるときには骨が折れるが、世のなかですべて下り坂になってゆく時代であるから、そのなかでひととき目立つ存在になるのは難しいことではない。

「勝つ」ための絶対条件

成富兵庫という人が言うには、「勝つということは、味方に勝つことである。味方に勝つということは、自分自身に勝つことである。自分自身に勝つことは、精神力で勝つことである。味方数万の武士の中にあっても、自分に続く者は一人もいないというくらいに平素から身心を鍛えておかないと、本当に敵に「勝つことはできない」ということだ。大木鉄山は、老後にこのようなことを申された。「柔術は相撲と違って、組んでたえ下になっても、後に勝ちさえすればよいように考えていた。しかし近年、ふと思いついたことは、その下になっておるとき、もし誰かがやってきて仲裁に入ったならば負けになるだろう。やはりはじめに勝つことが最後まで勝つということである」と。裁判沙汰や論争になったときもなど、早く負けて、負けた方が見事だということがある。相撲のようなものだ。勝ちにばかりあせって、卑怯な手で勝っても、それは負けとことよりなお悪い。だから汚い負け方ということになる場合が多い。上杉謙信は「つねに勝つなどは思っていなかった。ただ機会を逃さないことだけを身につけたのだ」と申されたそう。これはおもしろいことである。奉公人なども機会を外してしまつては、口はきけなくなるという。そのように、その場その場の働きや対応は、心に深く感じさせるものである。

お友達ご紹介キャンペーン

こんな時代だからこそ、大切なご友人と
武道稽古で心と身体を強くしましょう！！

Kyokushin Karate Tokyo Jonan Minato Shibuya

このチケットでご入会者をご紹介に空手着を無料進呈いたします

お友達ご紹介キャンペーン

道着無料チケット

何かを始めるのに遅いという事はありません